

まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

発行/昭和62年12月15日 No. 2

編集/(財)愛媛県まちづくり総合センター

特集 『美しい環境で暮らしたい』

川のルネッサンスに向けて
—小田川発信—

濃密空間そして建築家

流域環境ネットワーク



「舞」のまちづくりのまちづくり
大分県下郷農協見聞記
交流研修ツアー—顧末記
桑入工務店の建築

VOL 2

“川のルネッサンスに向けて”



いかざき 小田川

はらっぱから 発信

—— 五十崎の観光を考える会 ——

—— 町づくりシンポの会 ——

事務助っ人のひとり

河 島 登 紀

あなたの住んでいる“まち”好きですか。川をみつめてますか。

五十崎町の中央を流れている小田川は、私達の原風景であり共有財産です。大切な川に対してあまりにも無神経ではなかったかと自ら反省、小田川にこだわって暮らしの見直しが始まりました。

河川改修に関わる話し合いの中から、川のあるべき姿の研修をまず私達で行おうと、山口県の一の坂川、京都府鴨川・桂川・仙台市・広瀬川・高知市鏡川、果てはヨーロッパへとスイス・チューリッヒ州のツール川・テス川・グラット川・リマット川、西ドイツのポーン湖の植生護岸等々研修を行い、また、研修先は私達以上に川にこだわりの自然環境に熱心に取り組んでおられる人達に出会い、地域と人とのネットワークが次第に広がってきました。

小田川はらっぱは、素晴らしい自然公園です。四季折々に菜の花・彼岸花・野菊・コスモス、名前も知らない（ごめんなさい）小さな花、若葉の移り変わり、昆虫が飛



第2回水辺の散歩ウォークラリー

び野鳥が舞い……子供も大人も一日中楽しめます。四年前から始まった毎月一回の日よう市、店の方もお客さんも小田川に心のやすらぎを求めているのかもしれない。

水辺の散歩ウォークラリー、水辺を歩きながら川をみつめ、魚の底生動物から川を学びクイズをし、お弁当を食べて親子いっしょに一日過ごします。

河川敷の竹林・榎林を美しくしようとして、かぐや姫共和国づくり、かぐや姫の里竹やぶ掃除など、これらは自由を基本に、やりたい者がやりたいことをやれるように（やった者が始末をつける）するのです。もちろん五十崎の地域哲学“美しい自然”“美しい人”

“美しい産業”のもとに。

こうして川を見つめ直してみると、川の汚染が年々ひどくなるのに気づきます。その最大の原因が私達の家庭から出てくる雑排水によることを知り、あまりにも無責任だった自分を反省しました。私達が毎日飲んでいる水道水の水は、小田川の伏流水、その小田川を毎日知らず知らずのうちに汚しているのです。

そこから、合成洗剤から石けんに切り替える運動が始まりました。今年の手づくり文化掘り起し祭（主催五十崎の観光を考える会）と、文化祭（主催文化協会・中央公民館）において、“石けんから始めよう暮らしの見直し”コーナーを設け、合成洗剤と石けんでコマツナの発芽状態を見てもらいました。それらのことから、少しづつ地域の人達の心の中に入りこんでいくことなるでしょう。

私達は、誰でも自分達が住んでいる“まち”が素適なまちでありたいと、すてきなまちにしたいと思っ

子供達に、川の自然のやさしさ、厳しさを教えることは今の大人達の責任ではないでしょうか。

私は、子供の頃の川の流れる水が足にあたる感触、石ころがあたる足の裏の感覚を、最近川を歩いてみて再発見。とてもなつかしくうれしい感覚でした。今の子供達にそういう機会がなかったら、川があまりにも遠過ぎてしまつて、川が川でなくなつていくことにはさえ無神経になつてしまつてはいませんか。

小田川からの町づくり、美しい小田川を未来へと研修・シンポジ



コマツナの発芽の様子



ウム・河川交流会・講演会等々を行つてきたことで、県外国外へとネットワークが広がつてきました。高知の鏡川研究会との交流を始め、愛媛大学の水野信彦教授、新田高等学校の桑田一男先生、各研修地で出会えた数々の人、遠くは、チューリッヒ州河川局のゲルディー・建設課長、ケラー副課長とのネットワークができ、ヨーロッパ研修のことでご指導いただいた信州大学の桜井善雄教授が来町されることになり、柳川堀割物語の映画で知られる柳川市役所の広松伝氏も、映画を携えて五十崎へ来られました。

こうして広がつていく中で、県内各地の川との交流が少ないことを淋しく思います。

どうしても一町村だけでは解決できないことに数々出合うことになりました。

川の浄化は、流域で取り組まなければどうにもならないのです。そのため、いかぎの小田川から流域のみなさんへ発信！

川のネットワークしませんか。各地で取り組んでおられる情報交換・人材ネットワークができたら……。

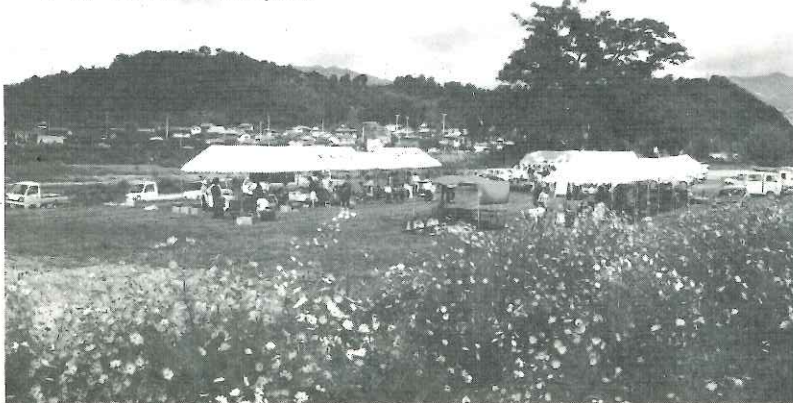
水面に小さな石を投げたら、たとえ小さな石でも波紋は静かに静かに広がっていきます。波紋は自然に広がっていきます。

こんなふうに、みなさんに広がっていくことを願っています。小田川流域から肱川流域へ、日本の全ての川へ、そして世界へと川のネットワーク

川のルネッサンスに向けて蒼い地球のそれぞれの「まち」だから

いかぎ小田川はらっぱから発信
言
あなたのまちから、川から応募待っています。

いかぎの日曜日



いかぎの日曜日

毎月第2日曜日
あさ10～ひる2時
皆さん、小田川はら
っぱへ遊びにいらつ
しゃいませんか。

濃密空間

そして

建築家

えひめ地域づくり研究会 議員

白石高啓

かたぐるしいテーマを掲げたがより親近感のわく方向へ努力してみたい。

さて、「濃密空間」——ききなれない言葉かもしれないが、いつもの生活空間を路上観察的視野で周辺を眺めてみると、いろいろのものが見え、時間・空間・人の織り為す濃密な心のコラーシユが浮かびあがる。

ではその空間はどこに//路地のなか、街並みのなか、都市の一部鎮守の森、等の外部空間そして、すまい・劇場空間・その他建築の



大阪法善寺横丁

内部空間に発見、体験できる。

具体的には、京都先斗町の界限大阪法善寺横丁、新宿歌舞伎町、讃岐金毘羅宮等の外部空間や、奈良慈光院・内子座・茶室・民家の内部空間等が上げられる。又最近の体験でシンガポールのチャイナタウン、香港の九龍城や建築高密度地区が新鮮でショックなアジアの濃密空間の発見であった。しかし、その場所、地名そして写真からイメージは伝わるのだろうか？

る・聞く・触る・嗅ぐ・味わい

らに第六感を働かせ、静かに待っている熱き感動が湧いてくるであろう。そのときこそが真に濃密空間の体験である。

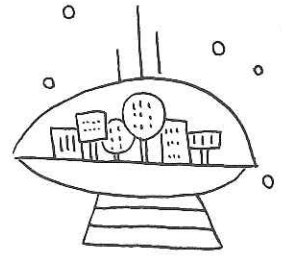
しかし、何も響かない伝わらない場合は、その人にとっての濃密空間は、人間そのものかそれとも別な領域か、経験不足か、何れかであろう。私にとってのその空間は非常に重要な創造への起爆剤であり、生きてゆくうえでの豊富な栄養剤だ。ボキャブラリー不足は

濃密空間ーそれは私にとつて起爆剤であり、栄養剤だ。

とりあえず、その空間に身を置きフィーリングを確かめてみてはどうだろう。きつとなにかがある//その空間でこころを豊かにし視

覚悟の上で、濃密空間とは？を表現描写出来たと仮定し、何がいたいのかと思うであろう。即ちこれからの「まちづくり」

に欠かすことのできないキーワードであり、よりどころである。果たして誰がその空間を具体化するのでしょうか？そこに登場するのが「建築家」なのだろうか。しかしこの「建築家」くらいイメージの定まらない言葉は少ない。なぜか「Architect」は辞書にあり、「建築家」は一般の国語辞典では発見しにくい、これはどうしたことか？建築家諸氏のP・R不足か、それともこれから生まれる職能なのだろうか。或るひとはいう。「二十一世紀は建築家の時代だ」と//「建築家」は古代エジプトの頃から存在しており、歴史的にも長大なスパンで活躍しているのだが、いまひとつ存在感が希薄だ。このようなとき、87・6・15、(新日本建築家協会(JIA)が発足し、日本の建築界では画期的な出来事となった。とにかく社会に認められた「建築家」の団体が



誕生した。

目的は建築文化の創造・発展に貢献と記され、ある方向性が示され「建築家」のイメージが徐々に定着してゆくとされる。少し話題がかたくなつたが、何れにしても「建築家」の社会的認知は時間がかかりそうだ。

さて、ここで少し発想を転換して創造力の豊かなひと「建築家」

情報社会の息苦し

の中で、人々は濃

密空間によりど

ろを求め

夢をかたちに実現する人と置換えてみると日常生活の周辺に多数活躍し

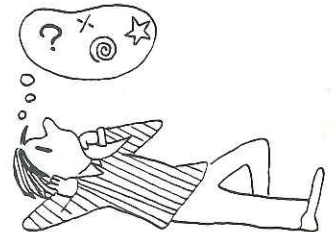
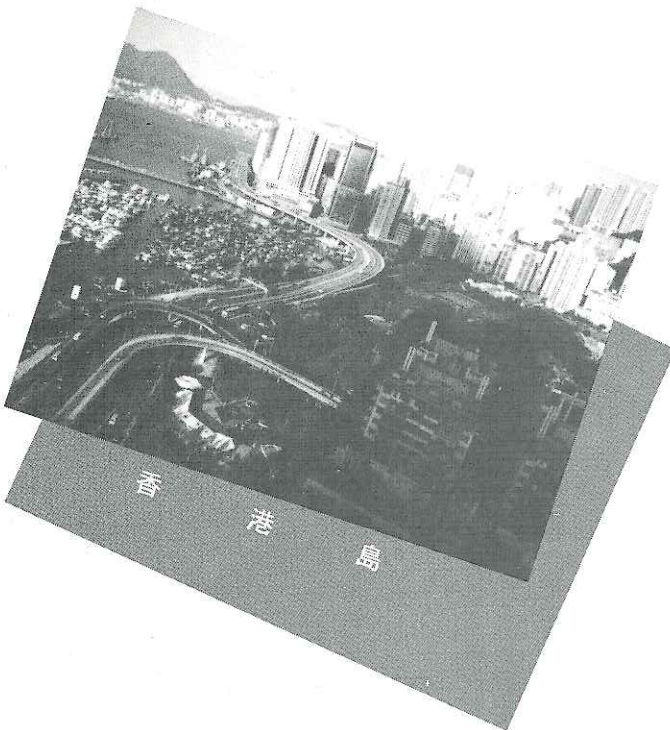
ている。人は常にロマンを求め、帆船に夢を託し、坂本龍馬に心を動かし、人間を愛し、自然の色に感動する。人こそ「建築家」そのひとではなからうか。

未来をみつめるとき、情報化社会の息苦しさの中で、ふと心の和む空間に人々はよりどころを求めらるであろう。それぞれ真に濃密空間そのものだ。

これからのむらおこし、まちづくりにはコンパクトをあたえる空間、人と人とのコミュニケーションをより豊かにし幅広い人間ネットワー

クの形成になくはならない空間。その空間を創造、熟成するためにも「今」が大切な時だ。「えひめ地域づくり」の輪が柔らかな雰囲気に入れられ、広がり始めた。そのとき……

(新居浜市・ゆにて設計事務所)



流域

環境ネットワーク

イルドフランスの自治組合活動

(財)愛媛県まちづくり総合センター

宇都宮 栄一



フランスを訪れた私達はアンギス・シルピさん(フランス中
央科学研究所)の案内で、パリ周辺の農村地域・イルドフラン
スのオージ地区を視察をさせて頂く機会を得ることが出来まし
た。

自治能力アップ
のための事務組
合

オージ地区はパリから車で
高速道路を南下すること三十
分、セーヌ河の支流のオージ
川流域の谷間の地域です。こ
こには十六市町村でネットワ
ークし広域事業を行うための
オージ事務組合 (Sandica
intercommunal de la vallee
de Orge) があります。市町
村と言っても、フランスの場
合、一自治体は日本と比較に

ならない程小さく、フランス全土
には三万六千を数えます。そこで、
広域的に自治能力をつけるために、
小さな市町村で組織される場合は
自主的に数多くつくられて来た様
です。この組合は強制的なもので
も、法的なものでもなく、活動主
旨に賛同する市町村の集まりです。

多面的事業展開
を拓く

この農村地域は、フランス特有
の広い耕地でムギやぶどうだけを
生産している地域ではなく、少量
多品目の農産物を生産し、大都市

パリに直接販売をする農家の多い
地域です。

地形的には、中央に川の流れる
谷間の地域です。谷というのは関
東平野の丘陵地帯の谷というイメー
ジで、昔は川がよく氾濫をしてい
た様です。

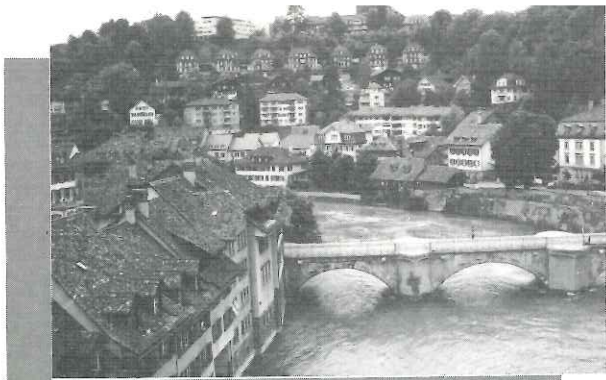
河川の環境・水環境を考えて行
く場合、上流・下流の行政区画の
ラインを越えた広域的な有機的活
動が不可欠です。この組合では、
最初は、河川維持管理・美化の活
動だけしていたそうですが、この
十年間で多面的に事業が広がり、
予算面では十年前と比べると二十
倍になったそうです。

その活動内容は、農薬などによ
る汚染問題、上水道・下水道の完
備・維持管理、河川環境整備(治
水・遊水)、河川・遊水地公園開

山 村 風 景 (スイス)



発、緑地・森林等自然環境整備、
住居景観保存、住宅地開発など、
総合化されたアメニティー対策プ
ロジェクトをしているのです。
また、事務組合の職員は技術職、
建築士、行政職などの専門職のス



都市住宅地 (スイス)

快適な農村地域の維持

この地域はパリ近郊の農村地域で、最近ではパリからの移住者が多く、都市住宅化が進んでいる地域です。全世界どこでも同じく、大規模でコストの低い農産物に対抗する農家経営は大変厳しい様ですが、倒産した農家はないそうです。また、農地や家屋を手放す場

タッフで、最近では、多様な広域目的を持つ事務組合の職員のネットワークを持ち研究会をしています。

合には、組合が買い取り、都会のサラリーマンの住宅として使用するシステムを取っています。

ここでも、快適な環境、健全な国土利用に関しては、相当の想い入れがあるのか、当然なことなのか、住宅地といえども、日本の様に山や田畑を切り開き、区画整備をし土肌が見えるものではなく、緑は最も重要視される住宅地づくりです。今まであった農家の再利用は重視され、木を切ることなく林の中に住宅を建てる感覚でした。河川敷のレクリエーション・スペース(テニスコート、サイクリングロード等)も林の中にフィットして環境を壊すことなく整備されています。

快適農村空間のための広域政策

日本では町並み景観保護といえは、観光の手段での見方であったり、特定の場所でしかまだまだ浸透していないようですが、ここでは、住宅、店舗などの新築、改築などは町並み景観保護条例によって、各市町村ごとに自主的に規定

されており、健全な農村住宅環境をつくることにより、学者、研究者に住んでもらおうという農村住宅地計画も進めています。

このパリ近郊のイルドフランスは台地での大規模農業と、この地区のような少量多品目生産の小規模農業と、コントラストに富んだ地域条件に基づく作物を生産しているのですが、フランスの経済にはそれほど大きな役割は担っていないのです。これらの都市近郊の農業は大都市パリをドーナツ状に囲む自然の美しい空間をつくる機能のために、意図的に整備、保護されてきたわけです。

自治意識と民主主義行政

水の環境に対する住民意識や政策は、日本と比べると随分進んでおり、上水道はもちろんのこと、下水道の浄化施設は農村でも自パiserセント整備されています。また、雨水も浄化してから川に放流するという話もありました。

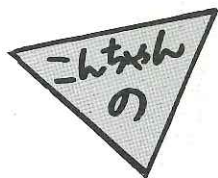
また、洪水防止のための植性護岸や遊水地、水辺の環境、公園は

自然再生、保護の立場から整備されてあります。そのための自然保護地区で民間の所有地は組合で買い取り整備をしていくそうです。

その事業は住民と話し合いを十分に行い、市町村と組合でパイロット事業として計画され、国から交付金を頂き、実施するという手順で、日本とは逆の流れで地域自治行政の展開がされるわけで、民主主義行政の在り方の違いに驚くばかりです。

何故、何処が、日本と違うかというところ、自分達の生活環境、土地利用は、自分の所有する住宅地や耕地だけでなく、森林や河川や住居環境についても自分達で決める、また決まったことには責任をとろうとする公共意識、もしくは、自治意識の違いではないでしょうか。また、地方分権化における体制が地方行政職員の質を向上させ、地域におけるこうしたネットワーク活動が総合的取組の容易さにつながり、それぞれの地域が意志を持った自治がなされている様です。





——まちづくり・むらおこし——

交流研修ツアー顛末記

(財)愛媛県まちづくり総合センター

近藤 誠

県外先進地の活動者たちと交流することにより、今後のまちづくり活動に役立てようという目的のもと、県内から若いリーダーたちが集まり、総勢二十名の交流研修ツアーを行った。

九月十九日(土) 事前研修。

打ち合せの中、視察先のお土産として参加市町村の特産品を集めた「えひめバック」を作り送ろうということになった。これが好評を得て、後々私達のツアーを成功に導いてくれたのである。

九月三十日(水) いよいよ出発。

松山空港に午前十時三十分集合(生名村・岩城村の五名については、新幹線で東京へ)。ここで、第一のハプニング。飛行機の時間が、予定より二十分も早まっ

ていたのである。私とU氏は、時刻表を見るなり冷汗タラリ。しかし、さすがまちづくりを行おうというメンバー、時間通りに集合して頂いたため、全員無事東京に向けて出発できたのである。

日程的にも、時間を無駄にすることはできず、メンバーには迷惑のかけどおしだったが、その一例がこの飛行機の中。昼食を取る時間がなかったため、機内に駅弁を持ち込んだ。みんなで食べれば恐くない、お茶のサービスを頂き、他のお客の羨ましそうな顔を横目に、優越感?に浸った昼食であったと思う。

羽田空港につき、モノレールで浜松町へ。そこで生名村、岩城村の五名と無事?に落ち合い、徒歩で日の出棧橋まで行き、スズエ倉

庫などを見学の予定であったのだが、あいにくの雨。その雨の中決死の覚悟で出かけていったあるメンバーは、倉庫に入り見学していると、「無断に職場に入って」と怒られたようだ。田舎もんはつらい。

日の出棧橋で地域総合研究所の猪爪さん、東京都の矢島さん、大分県大山町方たちと合流し、海上バスで船の科学館へ。そこで、「東京マンハッタン構想」(東京



湾の臨海部開発)について、矢沢さんより説明を受けた。

その後、西武の有楽町マリオンへ行き、西武の森川さんたちの説明を受けながらの見学。ここでは、社会の流れが物質経済から情報経済に移行する中で、マリオン全体をショーウィンドーと見たて、情報基地の役割を荷なっているということである。

有楽町マリオンを後にして、仕事空間・住空間・文化空間を有機的に合体させた大都市のインテリジェントビル、アークヒルズへ徒歩で。このビルの十七階にある地域活性化センターで、地域総合研究所長森戸哲さんに「いま、何故東京ウォッチングなのか」というテーマで講演して頂いた。

東京での一日を終え、旅館です



のままくつろぐ者、夜の町に繰り出す者と様々であったが、後、三日間大丈夫かなあ？

十月一日（木） 昨日の疲れを

残しつつ、町村会館を出発。地下鉄で上野駅まで行ったのだが、出発が若干遅れたため、東京名物の通勤ラッシュに巻き込まれてしまった。その凄さに一同啞然。みんなの無事を確認できたのは上野駅という始末で、東京は、住む所ではないと一同痛感。

上野駅から新幹線に乗り、途中「杜の都仙台」を横目で見ながら宮城県の古川まで。古川からは、中新田町の森田さんの用意してくれたバスで、バツハホールのある町、文化行政の町として名高い中新田町へ。そこで、本間町長から、中新田のまちづくりの経緯、取り組み、その基本的な理念などについてお話をうかがった。

このあと、中新田町の文化施設、東北陶磁文化館・墨雪墨絵美術館・アユの里公園・オープンスクールの鳴瀬小学校・バツハホールなどを見学し、宿泊所でもある公民館

に到着。

夜七時すぎぐらいからは、中新田町の有志（役場・商工会・中新田の未来を拓く会など）の面々との交流会。K市、Mさんのコーディネートのおかげもあり、腹の探り合い的雰囲気から、最後は「飲みニケーション」を通じた交流会が盛り上がった。その中には、公民館から抜け出し町内のスナックで交流を深めたメンバーもいたそうである。

十月二日（金） 陸羽東線、奥羽本線、左沢線と乗り継ぎ、最後にタクシーに乗り、ふるさとクーポン・月山自然水・西川塾などユニークなまちづくり活動を展開している山形県西川町へ。その間、五時間みなさん本当にご苦労様でした。

西川町では、企画開発課の福島課長、後藤さんの二人から今までのまちづくりの取り組み、また、現在計画・実施している「二十一世紀につながるまちづくり、クオリティ・ライフにしかわ」についての説明を受けた。

中新田町でもそうだったが、ここ西川町でも久万町のメンバーの頑張りがあった。自分から進んで何かを得ようとする積極的な姿勢は、見習わなければならぬ。さすが、まちづくりの先進地と改めて感じてしまった。その夜は、「仙台屋」という民宿で、中新田町の若手職員、西川塾のメンバーの計五人と交流会を持った。この民宿の山里にこだわった料理には一同感激。また、交流会もさることながら、その後の反省会を

兼ねた親睦会では夜遅くまで盛り上がり、このメンバーをまちづくり一期生として今後もネットワークし、頑張っていこうということを確認した。

十月三日（土） 最終日という

ことでみんな疲れた様子ではあったが、昨夜のこともあり和気あいあいの雰囲気。そんな中、後藤さんの案内で、月山・弓張平運動公園、大井沢文化人村などを見学。まだ十月の初めだというのに、美しく紅葉していた月山の風景は、みんなの心に印象深く残ったのではないだろうか。

山形空港から羽田空港。また会うことを確認し、解散。

四日間同じ釜の飯を食べた仲間たち、同じ時間を過ごした仲間たち、通りすがりの出会いではなかったことを確認し合った仲間たち、これから、まちづくり一期生として頑張ろう！



※ 只今、報告書作成中。御希望の方はセンターまで。

村おこしの原点を見る！

大分県・下郷農協見聞記(その二)

(財)愛媛県まちづくり総合センター

井口浩志

農協の生い立ち

一つの村に二つの農協

少々古くて堅い話だが、下郷農協設立当時の模様を簡単に書いてみたい。これは創立以来一貫している下郷農協の取組姿勢を知る上で、大きな手掛かりになると思うからである。

下郷地区(当時下郷村)は、地区面積の九十五%が山林という山間地帯である。戦前は、ごく一部の山地主が田畑のほとんどを所有しており、村民の多くは小作人が零細な農民であったという。

昭和二十三年農協法が出来る、小作・零細農民が中心となり下郷農協設立の機運が盛り上がったが、旧地主層の猛烈な切り崩しにより、設立総会に集まった者は村の零細農民の三分の一(百二十名程度)

しかなかった。

これは、旧地主層が所有する山林は農地開放の対象とならず、山仕事に依存しなければ生活できない零細農民は、その圧力に抗しきれず参加出来なかったためである。

下郷農協設立後まもなく、旧地主層を中心に「下郷第一農協」(その後合併し耶馬溪農協となる)が設立され、一つの村に二つの農協が出来たのである。

その後、「下郷第一農協」は赤字運営となり、販売代金の遅延や、販売価格も下郷農協より安いなど、第一農協の組合員の中に不安と不満が出てきた。元々下郷農協に心を寄せていながら「下郷第一農協」に加入していた農民達が徐々に下郷農協に加入するようになったのである。

下郷農協の市村参事は「農協は

農業の協同組合ですから、農家と一体になって、農家と一緒にできれば運営はうまくいかないというのが鉄則です」と言う。

木炭から農地利用型農業へ

昭和二十年代から三十年代にかけて、農家は三反から五反の農地だけでは生活出来ないため、農閑期には炭を焼き生計を立てていた。農協も農産物より木炭を売るのが、大きな仕事であった。

木炭は主に北九州へ売っていたが、三十年代に入りプロパンガスや石油の普及で木炭の需要が減り、木炭に変わる山村での生き方として、一部は椎茸に変わっていった。農協としてもキュウリなどの野菜を作ったり、米の「一俵増産運動」をやったり、畜産に力を入れ



下郷の安全な食品を運送します

るなど、農地を利用する農業生産に積極的に取り組むようになった。しかし、農産物は生物が多く日持ちがしないばかりでなく、二級品とか三級品も出来るということもあり、付加価値を付けて高く売る加工事業をかなり重視をしてきた。当時は味噌・醤油はもちろん芋飴を作ったり、タケノコやグリーンピースの缶詰を作ったり、キュウリの漬物を作ったりしていたが、まだ産業と言えるほどのものではなかった。

そういうことで、農地利用型農業への転換を計ったが、価格が非常に不安定で、市場へ出荷しても箱代や包装紙などの経費を引くと赤字になったり、天候や災害で不作になったりということ、農業を一生懸命やろうとしても中々

将来の見通しが立たないということもあり、かなり悩んだ」と市村参事は当時を振り返る。

牛乳の独自処理から直販へ

一方、下郷の鎌城地区に入植した開拓者は、地力の弱い農地での農作物の経営に見切りをつけ、昭和三十年から六頭の乳牛を導入し、順次増頭していった。

販売については農協の世話で、中津市や日田市の牛乳プラントへ出荷したが、プラントの経営状態が悪いため、価格も安く支払いも遅れるということで、酪農家の経営状態は大変不安定であった。

昭和三十五年、酪農家の強い要望で、農協に簡単な牛乳処理施設を作った。この施設を作るにあたり、組合員の間からは「こんな貧乏農協が、一部の組合員のために多大の投資をするのはどうか」という反対意見もあったが、売り手価格の形成の第一歩ということで納得をもらったという。

これをきっかけに、隣接町村の議会に請願し、大分県では一番最初に地元の牛乳を学校給食に使用することになったが、それでも供給過剰であった。

次に考えたのは、かつて北九州



乳牛の運動

に木炭を販売していたことから、小倉市に販路を求めたのである。しかし、百姓の商売はそう旨くないが、当初は農家の状況を良く理解してくれる職場とか労働組合に呼びかけたのである。牛乳のブランドも労働者の「労」と農民の「農」の字を採り、「労農牛乳」という少々いかつい名前前で売り出した。

最初は職場に供給していたが、転勤や日曜・祭日もあり、中々決まった量が売れないという問題が出て来たため、その後は消費者の家へ直接配達するようになったのである。

地元出身者や

親戚を訪問販売

職場や労働組合関係だけの販路では消費に限界があるため、一般の消費者への売り込みを図ったが牛乳はメーカーの力が強く、下郷という田舎の牛乳が簡単に割り込める余地はなかった。

そこで考えたのは地元出身者や親戚・知人に売ることであった。

昔から下郷は働く場所がなく、長男以外は北九州へ働きに出ることが多く、親戚や知人が沢山住んでいることに着目したのである。

農協は、組合員から子弟・親戚・知人の名簿を提出してもらい、その名簿を頼りに、小倉市で取り引きのあった炭屋の二階を借り、組合長以下が売り歩いたのである。

最初は四百本、五百本というところから徐々に販路を広げていったのであるが、メーカーや商社を通さずに、農協（生産者）が直接消費者に物を売るといった仕事が、牛乳を通して始まったのである。

広がる消費者・

増える直販農産物

牛乳を売り始めた当初二〜三年はかなり赤字であったが、昭和四

十年代に入ると三千、四千所帯と顧客が増加していった。

農協は小倉に出張所を置き、三名の職員で配達・集金・注文という仕事を行っていた。その内、消費者から野菜や卵や漬物、そして中には漬物石や七夕の竹がほしいという要望が出てきたのである。

農協はそれらの要望に添えていくと同時に、一定の卵や野菜が定期的に消費をしてもらえることから、農家の奥さん達に養鶏や野菜作りを積極的に勧めたのである。

また、農産物の価格については、生産者が引き合う価格をということで、「こういう値段で売りたい」というチラシを入れ、生産者と消費者が納得のいく安定的な価格形成を行っていったのである。

こうして牛乳を柱に色々な農産物の産直が始まり、張り合いのある安定した農業への第一歩を踏み出したのである。（つづく）

なお、昭和六十三年一月十六（土）午後一時から、中山町佐礼谷公民館において千葉県農業大学校教官・小松光一さんの大変おもしろい講演があります。元氣アップ農業とイキイキ農村生活に関心のある方は是非どうぞ！出席希望の方は中山町佐礼谷支所の井上支所長まで。

☎〇八九九（六八）〇〇〇一

出島二郎氏の「イベント再考」論

62・10・28 ミニ・フォーラムより

(財)愛媛県まちづくり総合センター

文責 山本均

イベントをどうつくりたいのか

①長期計画を作れないようなイベントはやらない。

イベントを商品とすれば、戦略は三〜五年の目標設定がある。共同の目標設定がなければ必ず挫折する。

②他人と比較しないこと。

隣は自然がきれいで、うちは汚い。むこうは予算がたくさんある……。

比較論は近代主義である。西洋より日本が遅れているといった比較論は要らない。主体性のない人の話は必ず比較論になるものだ。

ものごとを見る時、まず、私が何をしたいのかをしっかり確認することが大事である。

③お金の問題は最後でいい。

成熟社会では、経営の三原則の要素が変わってきた。今は、人が

いないとモノは作れないし、モノがなければ金もできない。金が必要なのは金も順位が変わった。逆にいうと、そうでなければ小さい我々は生き残れない。金が無いのに金が先に来たら戦略的に負けている。まず何より人なんだ。

④おもしろくないことはやらない。おもしろくないことには知恵が出ないし長続きしない。

ここで大事な点は、「勉強しない人はおもしろくならない」ということだ。

遊びは非常に高度な精神訓練であるから、勉強しない人は遊べない。イベント再考の「再考」というのはこのことである。

素朴主義を排す

おれのふる里の自然の美しさを見に来いよ、素朴な料理があるよ……全然おもしろくない。

たまたまそこに住んだら石があった、ホタルがいるから見に来いよ……そんなのはあたりまえの話で付加価値ゼロだ。そういうのは不勉強の固まりで、二年目は続かない。やっているほうも別に感動していない。いつもあるものだから……。

「自分の感動してないものをなせ見に来いというのか、無責任極まりない。」あまり素朴なところでふるさと運動をやるといふのは二十年前の発想である。
まちづくりの「つくる、おこす」というのは学習するという環境つ

くりである。

フードピア金沢のこと

フードピアは、食物のフードと風土を重ねたものである。食談で精神的、自然的、物理的風土や文化を語りあうイベントである。

知らない人も金沢にたくさん居る。「知っているのはお前だけだろ。」「そりゃそうだ、おれが考えたんだから。」

知らなくて結構、アホは知らないほうがいい。アホに知ってもらうには、また努力が要る。

フードピアは、ほとんど宣伝しないのに、中央のマス媒体（クロワッサン、家庭画報、週刊誌、全国紙、NHKなど）に百五十本の記事が出た。



金沢を含め、ネットワークをしている町村でも、自分のまちをよく知らない人も多い。誘客装置のイベントは誰でも考えるが、今はまだそのような傲慢なことをいう能力は備えていないので、自己批評装置のイベントを考えたいものである。自分の町の中に自己批評の能力を持っていることが真の活性化であると思う。

成熟時代を迎えたイベント

この先二、三年でイベントはピークを迎える。企業イベントでさえマンネリ化している時代に、皆さんがこれから勉強して……といってもほとんど商品価値はないだろう。

こういう時代は、あまり準備のないイベントはやらす、ゆっくりコンセプトを固めて、学習過程が終わる頃勇気あるイベントを打つべきだ。

既存の資源を利用する

フードピア金沢は、ハードウェアには全然興味がない。既存の空間を利用しようと考える。



なぜなら、利用しないと直す方法がわからない。今さら美術館を建ててもらわなくても、絵画やポスターを並べてみて、はじめて行政も利用者もどかが悪いかわかるのである。

質問

イベントの効果をいかにうまく波及させるか

テーマによって波及させなければならぬターゲットに波及させるということである。子供たちに子供にそれが届かなかつたら手法が悪いか何かであろう。

皆さんの話を聞いてみると、外部への配慮が「まごころ」ということになっていくが、私はあまりまごころは信用していない。無料必ずしもサービスという時代は終わっている。

値段をつけるということはコミュニケーションを明確にするということである。

質問

イベントに何が求められるか

イベントというのは異質のものとの接触を求めるものである。異質を結びつけるとすれば、異質なものを認識する力がないといけない。

ところで、子供のイベントは非常に難しい。必ず昔のイベントをやってしまう。自分の時代の子供のイベント、あんなバカな話はない。

コンピュータは教育に悪くて昔の竹スキーがよかった、我々の遊びのほうが高尚だった、なんて、大人のセンチメンタル以外の何物でもない。今の子供には、今の子供の遊びがある。

子供という名の大人社会の中に彼らが居ると考えないといけない。三歳以上の子供の服は大人の服と値段が同じということである。

質問

新しいものをどうやってつくるか

多数決原理でスクリーニングするとアイデアはほとんど悪くなる。みんなが参加しても、最後の決定権者はプロデューサー一人だ。

アイデアを通せないで悩む人はもともとそのアイデアがだめなんだ。新しい異文化を提案して初めから通ることはない。新しいことを提案して、向こうを説得できたことがアイデアだ。

「うちの課長は頭が古くて……。」
「古いのはお前だ。古いのがわかってやっているのだから、相手が納得できない理論を出すお前が古

い。」

行政が古いとか頭が固いとかいうのも全くうそで、どこにでも柔軟な考え方の職員はたくさん居る。食談会場は建物を作らないというのもそれで、美術館を使ってみて行政もここがおかしいとわかる。美術館に行ったこともないのに、市民だから美術館がわかる……そんなバカな話はない。

ただ、民間の力を利用したほうがいい場合もある。お互いの機能を使う中でコミュニケーションする。そこから場づくりが始まる。

問

古くなったイベントをどうするか

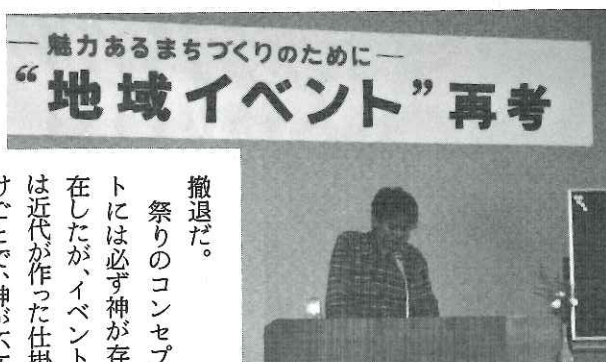
イベントに限らず、あるものをどうするかには三つある。

一つは、やめること。

二つ目は、戦術を変える、改善計画を考える。

三つ目はむしろ、コンセプト、戦略を変えてしまう。

私は、改善計画は遅いと思う。こういう時代だからコンセプトを変えるべきで、変えられないなら



撤退だ。

祭りのコンセプト

には必ず神が存在したが、イベントは近代が作った仕掛けごとで、神が不在

である。ただ、仕掛けとしての神は作れる。オリンピックの聖火が私の言うイベントの神様である。

問

田舎でのイベントは必ずしもビジネスと言えないが

外から来てほしいというのに、お金を落としてほしいということは何も考えてないのか。

お金と言っているのは、外から迎えるサービスシステムを明確に

せよと言っているのだ。たくさん人に来てほしいというのは、宿泊費とか落としてほしいということだろう、結果であれ目的であれ。それなら、泊まってもらえばいくらのサービスができるか明確にしてもらわないと行きようがない。

商品の話であるが、皆さんの一村一品運動は、ますます全滅するだろう。

農政で守られた米を守るのではなく、どうしたらおいしい米を作れるか考えないといけない。イベントなら売れるイベント、洋服なら売れるファッションを作らないといけない。この成熟社会で売れる商品を作るのは大変なことだ。

そこまでいくと、全員一致もあり得ない。戦略が一致することをネットワーキングというので、戦術で結んでももろい。

何か持って来いよ、で、おばあちゃんのウメボシを百円で売ったりする。全然おいしくない。おいしくなければ金を取ったらいけない。そういう素朴主義が学習不足だ、昔のままだから。

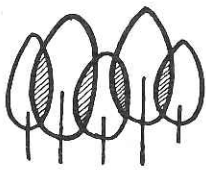
ウメボシは先端食品だ、それは

土の部分だ。それに風の部分、味をマイルドに形を小さく、それで百円取るべきだ。昔のまま食べなさいではダメだ。今の我々の食卓でどう食べるかという風の部分がないといけない。

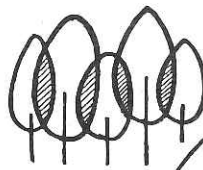
米は変わらなくても、米のポツシヨニング。価値観は変化する。高級料亭で最後に出るのはオニギリだ。根っこは同じでも出す場所が変わる。だから料亭のオニギリは高く、オニギリ屋のは安い。ポツシヨニングが変化したのだ。

私の言ってきたお金の話は、そういう意味だと理解していただきたい。





あふれる自然と村の
21世紀をめざして



素
人工場長の
の
会社経営

●(有)別子木材センター●

工場長 筒井 衛

別子銅山閉山後十余年が過ぎたが、この間これと言った産業もなく過疎化の進む中、長瀬村長の勇気ある決断をもって、過疎化の防止と森林資源の有効利用を目的に工場を建設し運営が始まってはや一年が過ぎた。

村予算の1/3を投入したこの事業は、村の運命をかけた大事業であるが、木材も、会社の経営も全く知らない私に「まかす」と言った村長の勇気と、引き受けた私の無知と無謀さに恐れを感じるこの頃である。

しかし、引き受けた以上、中途半端じゃ、やれやしない。村からの出向なんて、クソクヲエ。村を生かすも殺すも私の腕次第。うまくゆけば、愛する村に活気が出るし、失敗すれば本当に村を殺すことになる。こんな仕事は、やりたくてもなかなか出来るものではない。こんなチャンスを与えられたことに感謝

している。

何も知らない四人の仲間と共に三カ月間の研修を行い、その時初めて、集成機や巾はぎ板を知り、原価計算・会計事務を習い、一年を経過した今ごろやっと経営という意味がわかりだした気がする。

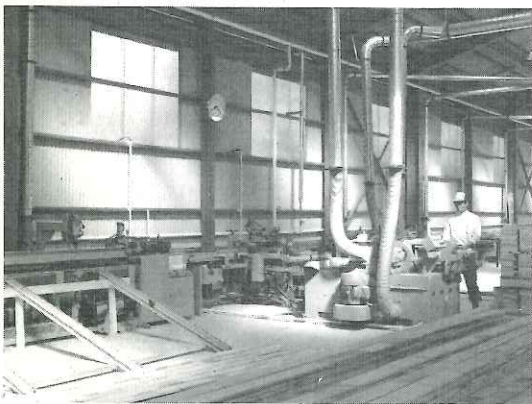
それと共に、一企業として生存競争の激しいこの世界で生き延びてゆくことの難しさ、一円の利益を得ることの苦労、時代にあった商品開発・従業員や地域の人達とのコミュニケーション、その他etc、試行錯誤の連続である。

しかし、この事業は別子山村の立地資源から判断して、正しい選択であると思う。それは県内外からの視察者が多いこと、全国各地の川上で集成材工場の建設ラッシュを見ても明らかである。

ただ不幸なことに、数億円の巨費を投じて建設した設備が埃をかぶり、会計検査の目を恐れている例も全国に数多いと聞く。

別子木材センターは、幸いなことに、従業員を集めるのに苦労する程、仕事量もあり、順調に運営できるのは、各方面の全面的な協力が得られている為であり、これに甘

▼ センター内の様子

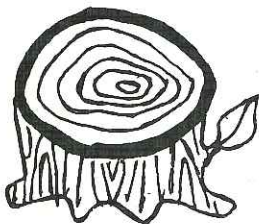


▼ (有)別子木材センター全景



えていけば、前進はあり得ない。

素人かつ半人前となった現在、一刻も早く一人前となり、山間地の小さな会社であるが、日本一の稼働率を誇る会社となる様、全村をあげて頑張っている毎日である。





▲ 運営委員のごあいさつ



西尾勝先生の
記念講演

えひめ地域づくり研究会議発足

県内各地のまちづくり活動者をネットワークし、情報交流・相互学習を行い、それぞれの地域を生き生きさせようと、去る11月14日、内子町“内子座”でえひめ地域づくり研究会議が発足した。

入会者は約250人で、当日は160人の出席のもと、設立総会を開催し、東京大学教授 西尾 勝先生に記念講演をいただいた。夜のパーティは人間交流に華が咲いた。

2日目は、内子町の町並みや、五十崎の手すき和紙、河川保護などの現地ウォッチング学習を行った。

この会は、会員の主体的行動をモットーとし、従来の形式的な会則はなく、事業内容は、誰でも熱意ある人が、必要とされる課題を提案し、運営委員会を主軸とし活動する予定である。。

【代表運営委員】

岡田 文淑（内子町）、渡部鬼子雄（久万町）、
守谷 和久（川之江市）



▲ 盛りあがった記念パーティー



▲ 内子の町並みウォッチング



▲ 五十崎の河原にて

「舞・たうん」編集係
二人のGAL（都築・田村）まで
〒790 松山市道後一万一の二
（財）愛媛県まちづくり
総合センター
TEL (089) (三五) 五五七
FAX (二五) 六六〇

まちづくり活動の情報紙としてのこの「舞・たうん」を隔月で発行しております。皆様からのレター通信紙として活用下されれば幸いです。
内容についてのご意見や、活動内容についての記事など気楽にどんどんお寄せ下さい。
次回「舞・たうん」特集は「イキイキ農業です」